

東京の女性弁護士として

会員 家高 陽子

1 東京に慣れたか

私は、弁護士になる以前まで関西に住んでおり、就職活動も関西で行っていたので、東京に来るなんて夢にも思っていなかった。ご縁があって、私は東京に来ることになった。

東京で働くという話を頂いたとき、関西在住の私は漠然とした不安を抱き、私よりも一足先に東京に就職した関西出身の同業の友人に相談をした。すると、弁護士になる不安はあっても、東京に対する不安はなかったとの回答を得た。たしかに、約1年間の修習で多くの経験をさせて頂いたものの、修習生と法曹との差はとても大きい。それに比べると、関西と東京の差はそこまで気にするものではなかった。東京には梅田がたくさんあるようだという感想を抱いた。「東京には慣れた？」と聞かれることは多いが、エスカレーターの立ち位置や鉄道の複雑さに関すること以外には特に回答は思い浮かばなかった。

2 女性弁護士として

東京で弁護士として働いてみると、修習地の京都や出身ロースクールの所在地である大阪よりも、女性弁護士と出会う機会が少ないと感じる。事件の種類にもよるかもしれないが、担当事件の相手方はほとんど男性弁護士である。もともと弁護士全体に対する女性の割合は多くはないものの、東京に来てから、自分が少数派であることをふと思うことがあった。弁護修習先が女性弁護士2人、男性弁護士1人の事務所であったことが影響しているかもしれない。また、出身高校には法曹の集まりがあり、70期の

司法試験合格者のお祝いの会に出席したことがあるが、出席した70期合格者約10名のうち、1名が男性でその他全員が女性であったことも影響しているかもしれない（なお、生徒の男女比はほぼ1：1の高校である）。

男性だから、女性だから、などと言うつもりはないが、少し寂しく感じている。

3 東京の弁護士として

私が弁護士になったのは、簡単に言うと、祖父や父に「弁護士なら何でもできる」と言われ、何でもできた方が良さそうだ、と思ったからである。その言葉の裏には、勉強・調査の積み重ねや、人へ伝える能力が前提となっていることを、弁護士になって痛感している。その積み重ねや努力を怠らず、成長できればと考えている。

私の祖父は東京に出張することがしばしばあり、約10年前には、私を出張に同行させて法務省等を訪れたことがある。先日、家族から、昔祖父が千鳥ヶ淵の桜がすごく綺麗と言っていたが、東京の桜はどうか、というLINEがきた。そこで、私の法曹への道を応援してくれていた祖父を思い返した。

東京に慣れているのかどうかも、弁護士として成長できているのかどうかも、自分ではよく分からない。私の司法試験の最終試験日の後すぐにこの世を去った祖父に、「私は司法試験に合格して、東京で弁護士をやってるんやけど、弁護士として成長できてるんやろか」と心の中でつぶやいた。